

MAKING OF ISEO NOSE on OKAYAMA

BOOK LAUNCH PARTY
at PEPPER LAND
2026.2.13.FRI
19:30-21:30 入場無料 1ドリンクオーダー
振舞酒あり☑ サインもします!!

日本のアンダーグラウンドカルチャーを牽引してきた表現者であり
ライブハウスオーナー能勢伊勢雄のロングインタビュー!!!!!!!!!!!!!!

能勢伊勢雄入門 出版記念パーティー

雑談出演: 能勢伊勢雄、軸原ヨウスケ、村岡充、成田海波 and more

宇川直宏 (DOMMUNE) 赤田祐一 (「スペクテイター」編集者) 熱烈推薦!
全384ページ! 部数限定出版! 定価 3,000円 + 税

能勢伊勢雄氏と私自身の人生の肥やしが、ここまで重なり合っていたという事実に昇天!!! 読めば読むほど、かつて体験したテキスト群が側頭葉から降りてきて、自らのエゴ＝アイデンティティの根や幹を形成した養分として再活性化する!! これは、松岡正剛氏、能勢伊勢雄氏、武田崇元氏、武邑光裕氏、そして私、宇川直宏が、暗黙のうちに共有してきた教義体系そのものではないか!!!!!! アウト・オブ・ヘドニズム!!!!!!

宇川直宏 (DOMMUNE)

ぼくは能勢さんの話をラジオで聞くのが好きだ。能勢さんの話を聞いていると、「生きていく上で大事なことはみんなわかってしまうのではないか」という気持ちにさせられる。(ドキュ・バイオグラフィ)とでも呼ぶべきこの本を読み、氏の肉声で語られるカウンターカルチャーの数々の逸話に魅了された。新しいものを創造したいと考え、苦闘している若い人たちに本書を推奨したい。きっと良いヒントが与えられると思うから——。

赤田祐一 (「スペクテイター」編集者)

お待たせしました！

2021年9月、コロナ禍・緊急事態宣言が繰り返される中で始まったトークイベント「能勢伊勢雄と岡山」at ラウンジ・カド。全5回、全25時間!!!様々な事情があり、出版が遅れに遅れてしまいましたが、晴れて出版となりました!!!!!!

お知らせ:当初より告知していましたが全てのトークイベントに来てくれた人には書籍謹呈いたします。もし、まだお手元にない方はお手数ですがご報告ください。

- 第1章 ペーパーランド以前 少年期～実験映画の時代 1947-1974
- 第2章 岡山藝能懇話会 戦後岡山の文化復興 1945
- 第3章 岡大闘争の時代 共同性の地平を求めて 1969
- 第4章 ペーパーランドの始まり 1974-1988
- 第5章 第三期以降のペーパーランドとこれから 1989-



著者:能勢伊勢雄、聞き手 & デザイン:軸原ヨウスケ (COCHAE)、編集協力:瀬尾健、瀧亮子 (大福書林)、伊吹圭弘、宇野澤昌樹、企画協力:成田海渡 (ラウンジ・カド)、村岡究、協力:山瀬正裕、工藤直貴、藤田真、石井智章、沖津美邑、印刷・製本:モリモト印刷、発行所:COCHAE、<https://cochae.com>©2026 Onchu, Inc. Printed in Japan
ISBN 978-4-908465-29-1 C0072

博覧強記な奇書の降臨である。㊦一九七四年、岡山県岡山市。能勢伊勢雄氏が立ち上げた「ペーパーランド」という場が、ライブハウスや上映空間の機能を超え、如何にして思想的かつ実践的なメディア装置として展開していったのか?その生成のプロセスがこの書『能勢伊勢雄入門』には刻まれている。㊦能勢氏の語りから立ち上がるのは、ダダ、アクションイズム、ハプニング、エクスパンデッドシネマといった前衛芸術の形式だけではない。寧ろそれらを必然として要請した身体・都市・制度への根源的な違和感である。㊦全裸でフルートを吹きながら岡山駅前の横断歩道を渡る。三足のわらじを履きつつも反万博運動を実践すること。㊦ジッピーコミュニケーションを運営し、列島全域からビートニクを召喚すること。㊦そしてコピーライトや既存のディストリビューションを無視して積極的転用を遂行すること。㊦これらのエクストリームなアクションは、能勢氏にとっては、社会のルールを一旦停止させ、現実を一時的自律ゾーンへと逸脱させるための最短で直接的な方法だったのだ。㊦ここで決定的なのは、氏の実践が制度内部ではなく、地方都市・岡山の日常空間そのものから立ち上がっているという事実である。在郷であるがゆえに、中央の文化資本主義に対して明確な距離を取り得たこと。だからこそ、岡山というローカルな地平において、パラマーケット・スペクタクルが、より生々しい身体性を伴って噴出しているのだ。㊦また本書では、シチュアショニズム／ギー・ドゥボールの思想が、岡山のコンテクストにおいてどのように転用され、実践へと変換されたかが示唆される。能勢氏の言う「積極的転用」とは、単なる引用や盗用ではない。それは、既存のイメージや制度を共犯的に裏切るための戦略であり、のちの日本オルタナティヴ文化に通底する態度でもある。そう岡山アンダーグラウンドは能勢伊勢雄氏によって開墾されたのである!!!!!! ㊦ゆえにペーパーランドとは、出来事が発酵し、制度化前夜のカルチャーがカオティックに反乱する為の文化的エコシステムなのだ!!!!!! ㊦ルドルフ・シュタイナー、出口王仁三郎、アルバート・ホフマン、ヨーゼフ・ボイス、ギー・ドゥボール、スチュアート・ブランド、阿部ビート、ティモシー・リアリー、ジェネシス・P・オリッジ、ジーン・ヤングブラッド、ダグラス・ラシュコフ、ロバート・アントン・ウィルソン、ハキム・ベイ、アラン・チューリング、R・U・シリヤス、ユナリアス、ドナ・コッシー、そしてラメルジー... この書では、これら史上空前のコンテクストが、戦後岡山の文化復興期における岡山芸能懇話会や、岡大闘争の時代と接続し、博覧強記な文化的視座をもって、岡山弁を織り交ぜながら、能勢氏自らの声帯を震わせ記述されていく。㊦しかし、これら傑物に対しての言及は決して統合編集されない。常に未整理のまま併存し、語りは生々しく逸脱し、ノイズを孕む。それでもなお、全ては奇想宇宙の必然であったかのように、不可逆的に繋がっている。このカオスモスこそが、オルタナティヴ・カルチャーの生命線であり、記録されるべきリアリティなのだ。ここに紙とインクで記されたアルカイック・モダンな知の反乱こそが、制度化されないための条件であるかのように。㊦そして何より仰天したのは能勢伊勢雄氏と私自身の人生の肥やしが、ここまで重なり合っていたという事実だ。読めば読むほど、かつて体験したテキスト群が側頭葉から降りてきて、自らのエゴ＝アイデンティティの根や幹を形成した養分として再活性化する!! これは、松岡正剛氏、能勢伊勢雄氏、武田崇元氏、武邑光裕氏、そして私、宇川直宏が、暗黙のうちに共有してきた教義体系そのものではないか!!!! アウト・オブ・ヘドニズム!!!!!!㊦本書『能勢伊勢雄入門』は、氏の自伝であると同時に、シチュアショニズム／ビートニク／サイケデリック／オカルティック／エクスパンデッド／サイベリア／レイヴ／スーパーナチュラル・カルチャーの、純潔で正統なコンテクストそのものだ。もしや、アカシクレコードは吉備国に存在していたのかもしれない!!!!!!

宇川直宏(DOMMUNE)

カウンターカルチャー的なことをやっている人には、ふたつのタイプがある。ひとつはコマーシャルにやって成功して社会の本流に上昇していこうとするタイプであり、もういっぽうは、新たな世界の方向性をまさぐりながらラジカルなことをやり続け、マスの商業的成功にはこだわらない。たとえ、その内容や形式がくみとれなかったとしても、それはそれでいいと考えるようなタイプである。㊦後者を説明する言葉が UNDERGROUND(地下的存在)と呼ばれるもので、ルイス・ジャコブスが一九五九年、「フィルム・カルチャー」誌上で、自分の論文のなかで精神的な意味を込めて、個人映画の文脈で初めて用いたとされている。この話は、『スペクタクル 能勢伊勢雄』という本で教わった。㊦能勢さんは UNDERGROUD を「生の信念」として抱く人だ。ペーパーランド創業時から UNDERGROUND を第一の基準と定め、その言葉を店名に繰り入れて以来、新しいカルチャーの方向性をまさぐりながら最先端の文化活動を展開することから、いまでも多くの人たちに刺激を与え続けている。不肖、小生も「ロックマガジン」「EGO」などで、能勢さんの評論に新しさと感じ、鼓舞され続けてきたものの一人である。㊦能勢さんの軌跡をたどったこのオール・バイオグラフィーの本質を示すならば、UNDERGROUND SPIRIT にほかならないと思っている。

赤田祐一(「スペクテイター」編集者)